

Title	古代末シリア宗教史研究(三)
Sub Title	A study of the religious development in Ancient Syria (III)
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.39, No.1 (1966. 7) ,p.91- 114
JaLC DOI	
Abstract	This article is to show how the so-called solar monotheism appeared and developed in the Syrian local cults and creeds during the Hellenistic and Roman periods. It is well known that several Oriental religions were diffused and established in the Roman Empire and that their idea of god was tending towards a sort of monotheism. I have examined how the oriental cults were able to reach such a unique stage of the religious evolution, by surveying their structure and the process of their formation especially in the intermediate districts of the propagation from the East to the West. Here I studied the Syrian native cults and showed their idea of god evolved by itself up to the solar-monotheism and was amalgamated with that of other Oriental cults at last. The Syrian pagan monotheism thus established formed one of the strongest powers of the monotheistic trend in the Roman Religion.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660700-0091">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660700-0091</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 古代末シリア宗教史研究 (三)

小 川 英 雄

前々稿及び前稿の内容を概観するならば、下記のようなろう。

即ち、第一に *Dūsarēs* 神は主としてヘレニズム時代以後、シリアの沃地周辺で盛んに信仰された神であつて、信仰した人々は当時沙漠から北上してシリアの沃地に定着しつつあつたナバテア人を中心とする半遊牧の諸部族であつた。*Dūsarēs* 神の本地は太陽神ではなく、もともと北アラビアの *Shara* と云う山岳を信仰の本拠として持つ遊牧民の生育神であり、彼等の乏しい農耕生産やオアシスの灌木類の生育を司るものであつた。しかし、定住運動の進展にともなつて、*Negev* 地方で灌漑農耕が發展し、又より沃肥な北部の *Haurān* 地方に入植が進むにつれて、より高度な生育を司る神、即ち、当地方で農耕生産を代表するブドウの生産を象徴する *Dionysos* 神として大いに流行することになつたのである。

第二に、*Dūsarēs* 神と並んで盛んに崇拜された *Allāt* 女神は、単なるペアを構成していたのではなく、その普通名詞に由来する名前からも分るように、汎セム的な女神であり、シリアの各地では *Allāt* と云ふ名による他に、*Atargatis*, *Ashtarte* 或は

ギリシア語で *Aphrodite*, *Urania*<sup>(1)</sup> ラテン語で *Venus* として崇拜された大地母神と性格上同一である。このような性格の女神のかくも広範囲にわたる分布の故に、シリア辺境に定着しつつあつた諸部族の信仰の中で *Allāt* 女神の変化・發展を知ることはかなり困難である。オリエントの各地の考古学的研究によつて明らかになつたように、人々は文明の最初期からテラコッタ・各種の石による彫像として、又円筒形印章の図像として、戦神とも、天神とも、母神ともとれる裸の女神像を信仰していたのであり、原始社会や遊牧社会の場合とシリアの沃地のような定住民の文明の行われる社会の場合とは、祭祀の上でだけ大きな相違点が看取されるにすぎないようである。そして、アラビア系の諸民族の定住運動がシリアで有力となつたヘレニズム時代には、その人々の大地母神である *Allāt* 女神がシリア各地の大地母神の諸属性(特に *Aphrodite* と *Athēna* と云う二つの神名によつて表わされる諸属性)を結集しつつあつたと云えよう。<sup>(2)</sup>

以上の如き *Dūsarēs* 神と *Allāt* 女神の信仰の進化は遊牧民の定住化の際の宗教進化の一般的類形としても理解されるであらう

うが、両神の場合に特に注目すべき点は、この論文の冒頭に於いて述べたように、当時の宗教文化史上の背景である。ローマ帝国における東方宗教の流布の背後にはヘレニステイク文化と云う超部族的普遍的な文化があり、その中で東方諸民族の宗教が、同じように普遍的な信仰 (Cumont のいう太陽崇拜一神教) に向つて発展しつゝあつたのである。この信仰の一つの重要な性格は密儀宗教、或は救済宗教と呼ばれる信仰形態を持っていたことであつて、部族的な性格の強いユダヤ教を脱した信仰としてキリスト教が現われたのと同様の意味があり、この信仰によつて結ばれた密儀に入信することによつて、いかなる人も救済されるのである。

シリアがこのような信仰の進化において東西の結接点としての役割を果たしたことは地理的な位置から云つても明らかであるが、シリア自身の宗教発展はオリエント全体の上のような宗教発展とどのように関連していたのであろうか。Dūsarēs 神の信仰は太陽崇拜一神教の形成とどのような関連を持っていたのであろうか。

#### (四) シリアに於ける「神教的傾向の進化」

Allāt 女神がシリア各地の Atargatis & Ashtarte と習合して、それ等の女神の持つ諸属性を吸収し、沃地の典型的な大地母神になるのとならんで、Dūsarēs 神もそれに似た発展を遂げたので、ナバテア人が Haurān 地方で定住社会を築いたローマ帝政期には、これ等二柱の神以外は歴史的意味を失つたと見てよ

い。そして、前述の如きヘレニズム的背景のもとに理解されるべきこれ等二種の神観念・信仰について最も示唆に富む史料が、次に述べる第四世紀のキプロスの大司教 Epiphanius の「異端論」(Adversus haereses) である。<sup>(5)</sup>

(A) Dūsarēs 神と Allāt 女神

そのテキストを訳すと、ほゞ次のようになろう (LI, 22, § 311)。

「救世主はローマ皇帝アウグストウスの第四二年に生れ給うたが、それはローマ人のもとで行われていたコンスル制によつて、オクタヴィアヌス・アウグストウス自身がシラヌスと共に第一三回目のコンスルの職にあつた年である。つまり、ローマ人の間では次のように云われている。『彼等、即ちオクタヴィアヌスがシラヌスと共に第一三回目のコンスルの職にあつた時に、クリストが一月六日に生れたのであるが(この日は)冬至の日、つまり光が増し、日中が長くなる日から一三日目に当る。』

ところで偶像崇拜の徒であるギリシア人たちはその日、即ち二月二五日に祭礼を行うが、それはローマ人たちがサトゥルナリア (Saturnalia) と呼び、エジプト人がクロニア (Kronia) と云ふ Alexandria の人々がキケリア (Kikellia) と称するものである。そのわけは、二月二五日には日至点の通過が起るのであつて、それが冬至なのである。そして、光が増大し、日中が長くなり始めるが、一月六日、即ちクリストの生誕の日まで、毎日一三分ずつふえて、丸一三日かかる。かくて、シリア人

の間の智者エフライム (Ephraim) は、その聖書註解の中で次のように論じている。『我々の救世主イエス・クリストの肉をまとつた生誕である垂迹<sup>ベリシヤ</sup>、或は顕現<sup>エヒフヤニヤ</sup>と呼ばれているけがれなき人間化はこうして光の増大しはじめた時から一三日の期間をおいて定められた。なぜなら、光が増大して行く一三日間の日数を満す、この数字は我々の救世主イエス・クリスト自身とその一二人の弟子たちに相当するように定められたのである。』

この問題、即ちクリストの生誕に関して、他にいかなる理論と証明がなされたろうか。偶像崇拜の首領や詐欺師は真理の一部分をさえ認めないではいられないのであつて、彼等は彼等を信ずる偶像崇拜者たちが多くの場所で大規模な祭礼を(神々の)顕現の起つた夜<sup>(6)</sup>に行うよう欺いて、彼等が真理を希求することのないように迷わせている。

第一に、Alexandria のいづゆる「コレーの神殿」(Koreion) には非常に大きな社がある。それはコレー女神(処女神)の聖所である。人々は夜を徹して起きていて、歌や笛を奏する。夜祭が鶏の鳴き声と共にようやくにして終わるや、把火奉持の人が地下の祠にもどつて行き、台座に裸で鎮座している木製の神像を持ち、戻る。その像は前面に(或は額に)逆まんじ形のしるしを持ち、又両手にもそれぞれ同様な二つのしるしがあり、更に両膝にもそれぞれ二つあるので、あわせて金で鑄られた五つのしるしがついていることになる。

そして彼等は笛・太鼓・典礼歌(hymnon)にあわせてその神

像を神殿を中心にして七度びめぐり運び、そのあとすぐにそれを地下の祠にもどす。この密儀(mysterion)の正体を問われると、彼等はこう答える。『今日のこの時に、コレー女神、即ち処女神(Parthenos)が永遠の神(Aiōn)を生んだ。』

これは又、Petra と云う町——アラビア、或は聖書に書かれているエドムの首都——で、その偶像崇拜の社(eidoleion)でも行われていることである。その時、アラビアのことばで、その処女神を讃える歌がうたわれる。それ(処女神)をアラビア人のことばでは Khabū (Xaβōz) と云い、即ちコレー女神又は処女のことである。そして、それ(Khabū)から生れた Dūsarēs 神は主(despotēs)の一人子(monogenēs)なのだ云々。

こう云うことは又、Elūsa と云う町でも Petra や Alexandria の場合と同じ風に、その日の夜に行われているのである。』以上の Epiphanius の記事を要約するとほゞ次のようになる。即ち、クリストの降誕は当時一月六日に祝われていたが、ヘレニステイク時代の地中海地界では二月一五日に太陽神の再生が各地(Epiphanius の挙げるところでは Roma, Alexandria, Petra, Elūsa)で祝われていた。その場合、子なる神の処女神からの誕生と云う觀念とその祭祀とが、キリスト教のマリアについての教理と以ていることが、Epiphanius にとっては邪教の徒も又キリスト教の真理の一部を認めている証拠であるように見えたのである。彼は両者を、キリスト教の教えの中にある一三と云う数字によつて結びつけ、二月二五日の異教の祭もキリスト

教のものであると主張した。

ここでは Epiphanius のその主張自体を問題とするのではなく、彼にはキリスト教の真理を異教徒がかたつていっているように見え、その異教徒の方の祭が問題なのである。

まず、Epiphanius によつて Petra の処女母神として挙げられている“Khabū”<sup>(8)</sup>は、アラビア語の Ka'ab なる語幹と関係していることはすべての学者の一致しているところである。<sup>(9)</sup>ところが、この Ka'ab には「方形にする」「ふくらます」の両義があり (ka'abat となる) Mecca のカーバの如く、神或は神のすみかと考えられていたセム人の信仰の対象として有名な方形の石を表わし ka'ib となると、ふくらんだ胸を持つて女、処女の意味である) Sourdcl, Dussaud は前者の意味だけしかなかったのを、Epiphanius が誤解して処女の意に解した、と主張するのに対し、Rösch, Mordtmann, Littmann, E. Meyer, Cumont, Cooke 等はかの祭を祝つた人々が両方の意味を認めていた、即ち、“Khabū”なる語には処女神と石の祭壇の両方の両方の意味があつた、と主張した。この点について他の史料を参照すると、次のようなことが分る。

Johannes Damascenus の「異端論」<sup>(10)</sup> (101) に、「彼等 (サラセン人) は斯く偶像を拝し、暁をもたらず星や Aphrodité にさへひびきまじく。そして、彼女を自分たちのことばでは “Khabar” と称しているが、それは「大いなる」 (megale) を意味する。彼等はヘラクリウス帝の時代にまではつきりところうした偶像を拝し

ていた。」とあり、イスラームによる征服の直前までサラセン人 (Saraceni, アラビア人) が “Khabar” なる女神を崇拜しており、その神性は Aphrodité-Venus であつたことが分る。この “Khabar” は G. Rösch が Constantinus Porphyrogeneta や Cedrenus を引いて説明した通り、イスラーム教徒の祈禱文 “Allahu akbar” (「アッラーは偉大なり」) を誤解して、ギリシア語で “alla ūa kūbār, hō estin hō theōs kai Aphrodité” (「アッラーウアクーバルとは神 (allā) と Aphrodité (kūbar) のことである」) としたために出て来た形である。即ち、Johannes はイスラーム以前の史料 (Epiphanius に由来する) によつて、“akbar” に近い音の女神 Aphrodité がアラビアが崇拜されていたのを知つていたために、同時代 (後八世紀前半) のイスラーム教徒の祈禱文を誤解して、Aphrodité-Khūbar を「大いなる」女神であると思つたのである。更に、Rösch によると、この読み混乱は六世紀の Cosmas Indicopleutos<sup>(11)</sup> が Epiphanius を引用した際に、後者の “Khabū” (或は “Khaamū”) を “Khab(m)arā” と誤つたために、“akbar” (「偉大なり」) との混同が可能になつたのである。Cosmas のテキストは次のようになつてゐる。「昔からギリシア人たちは日の祭を行つていたが、そのやり方は真夜中に或る地下の聖所に入つて入信するのであつて、そのあとで外に現われ、《処女神 (Parthenos) が子を生んだ、光が増す》と叫ぶ。キプロスの司教大エピファニウスはこの祭をサラセン人たちが又、その崇拜する Aphrodité のため

に行う、彼等自身のことばでは、この女神を “Khamara”<sup>(13)</sup> と呼ぶ、と云っている。」

これ等三つのテキストの示すところにより、アラビアの Petra や Elusa では “Khabu” と呼ばれた Venus-Aphrodité 女神が、冬至の日に年の若神（子なる神）Dūsarēs を生んだとして、その祭が行われていたことは明らかである。

前稿において、ヘレニスティク時代のシリア、北アラビアの地で流行したナバテア人の主神の一つ Allāt 女神は大地母神であり、「神々の母」であつたことを示したが、Epiphanius の “Khabu” は Allāt 女神のことであらうか。Johannes と Cosmas のテキストではこれが Aphrodité とされているところから、神性において Allāt と Aphrodite-Khabu が等しいことは容易に推測されるであらう。Février, Robinson, W. Robertson-Smith, Cumont, Baethgen 等はこれを認めている。では “Khabu” のもう一つの意味である「方形の石」は前稿で論じた Allāt 女神の石偶としての姿であらうか。この点も Cooke, Cumont, Robinson, Eisler 等によつて認められている。<sup>(14)</sup> これ等の人々の説くところを総合するならば “Khabu” は Mecca のカーバや Emesa の「太陽神殿」にあつた黒い石や Elusa の同様な石<sup>(15)</sup>、又 Suidas の伝える Petra の石偶<sup>(16)</sup>が示すように太陽崇拜と密接に関係のある石偶崇拜の存在を示しており、Petra や Elusa の場合はその石 “Khabu” は太陽神 Dūsarēs のシンボル、又はその母 Allāt を意味した、と云うことになる。

Cumont はこのことをソトラ教の “petra genetrix”（誕生石）の思想と対比させている。<sup>(17)</sup> Février によれば、当時のシリアには子なる神の考え方が流布していたことを示す考古学上の証拠があり、Petra からは Dalman によつて、子なる神の有翼の像が見出されている、と云う。<sup>(18)</sup> ではこの母子の神 Allāt と Dūsarēs について、無垢受胎による子なる若神の顕現 (“Parthenogenesis”) が Petra や Elusa で信じられていたであらうか。前稿に記したように、<sup>(19)</sup> Allāt 女神には戦う処女神 Athēna 又は月の処女神 Artemis の神性をもつてあらわされる側面があり、又ギリシア語、アラム語により “pure” の意味の形容を付されることがあつた。<sup>(20)</sup> これ等は大地母神のみのりをもたらしがれない生命力を象徴するのであらう。Baethgen は Carthago の大女神 Tanit が Artemis や Diana と呼ばれ、碑文に「大いなる母 Tanit 女神」とある一方で、「天の処女神 (Virgo Coelestis)」とも云われていることを引いて、神々の母 Allāt 女神が処女神であつても不思議はない、と述べている。かくて Baethgen の他、Cumont, Rösch, Mordmann, Eisler, Février 等は Epiphanius の記事の通り、処女母神 Allāt からの年の若神太陽 Dūsarēs の生誕の祭が実在したことを認めている。

一方、以上のような Epiphanius 解釈の全体或は一部に対して疑問を持つ学者もいる。Soudel は Dūsarēs 神の太陽神としての神格は存在しなかつた、<sup>(21)</sup> 又 “Khabu” は聖なる石以外には何も意味しないとし、更にはシリア宗教のシンクレティズムに

対して否定的な見解に立つて、Cumont を中心とする上述のような立場に反対している。Sourdel が主として依拠している Dussaud のこの問題についての見解は次のようなものである。それによると Suidas に記されている黒い石、つまり Petra の Dūsārēs 神の神体のアラビア名が Epiphanus の云々 “Khabū” であり、“Khabū” にそれ以上の意味はない。碑文に出る Dūsārēs 神の “MWTB” (“モータフ”、Dussaud の訳によれば “thronos” 即ち Dūsārēs 神の鎮座<sup>(28)</sup>)と古銭に出る三つの “baitylia”<sup>(29)</sup> とがペトラのカーバを構成していた。ペトラの代表的な「高き所」 (“Great High Place”) で発見された大祭壇の中央のへこみが長辺と短辺の比がほぼ三対一 (Robinson) によると長辺が四三インチ、短い方が一四インチ、深さ四インチ<sup>(30)</sup> になっているのは、古銭の三組一對の Dūsārēs 神の “baitylia” がそこにおさまっていた証拠である。このような “triple bētyle” の例として、Sourdel は前々稿に図示した Bostra と Adraa の古銭、El-Oum Taiyyé の上の楯<sup>(31)</sup>、‘Ain el-Meisari (Der’a) の祭壇の画像などを挙げている<sup>(32)</sup>。

こうした根拠によつて、Dussaud は Epiphanus の記事の内容について懐疑的態度をとり、“Khabū” を処女神としたのは Epiphanus の意味取りちがえ (“quiproquo”) であり、又それが Allāt 女神であるとは勿論云えない、古いセムの石偶像崇拜だけがあつた、と考えた。

しかし、Cosmas と Johannes の上記のテキストから “Kha-

abū” と Aphroditē 女神とが同じであることが分らないであろうか。更に Bostra 及び Adraa の古銭上の画像の意味、又碑文の “MWTB” の意味については既に述べたように異論が多い<sup>(33)</sup>。たしかに、ヘレニスティク時代のシリアには古いセムの原始信仰が残っていたであろうし、特に遊牧民の定住運動は沙漠周辺の古い信仰や習慣を持ち込んで来たであろう。それ故、Dussaud や Sourdel の考えたように、宗教混合のない、純粋な状態の信仰が当時のシリア宗教の基盤として存在したにちがいない。しかし、ユダヤ教でさえヘレニズムの影響をまぬかれず、Petra や Alexandria のような国際都市が出現した時代に、ヘレニズム時代特有の宗教混合や神話形成が全く否定されてよいかどうかは非常に疑問である<sup>(34)</sup>。その点で特に注目してよいのは、G. Rösch による、Sourdel や Dussaud と全く逆の立場に立つ、北アラビア宗教の神話解釈である。

Rösch は Epiphanus の記事はヘレニズム的宗教混合に由来する神話の形成を示すものである。即ち、Petra の石偶像 (Khabū) が独立した女神になつたのはエジプトの Isis-Horus についての神話の影響によるのであつて、後者によれば冬至に Isis 女神は Horus なる太陽神を生んだが、エジプトではこのような Isis 女神が「Horus 神のすみか」と称された。これがセム人の石偶像崇拜の根底にある “bet-el” (神のすみか) と云う觀念及び Dūsārēs 神 (Rösch によると雷神としての性格を持つ) と Horus 神 (春に再生した太陽神) の生育神としての類似から、Petra の

前稿で述べたような Allāt 神の石偶が Dūsārēs 神の母とされるに至った。Rösch の云う通り、Epiphanius の “Khabū” 神話とエジプトの Isis-Harpokrates 神話との対応関係は明白である。又、私が別の論文でナバテアとエジプトの文化的交流を示す史料として挙げておいたものの他に、シリアの Ashtarte-Aphrodite 女神とエジプトの Isis 女神の交流を示す証拠はいくつか挙げる事が出来る。そして、最近（一九四九年）R. Pet-tazoni が “Aion-(Kronos) Chronos in Egypt” と云う論文<sup>(37)</sup>の中で解明したように、Epiphanius による Alexandria の密儀の記事は、結局は Rösch が述べた上記の Isis-Harpokrates 神話のヘレニズム的（或はオルフェウス教的）発展を示すものであり、Rösch がかの密儀の中にグノーシスや新プラトン主義神学のおいをかいたのも当然であつた、と思われる。

しかし、シリアの宗教混合をエジプトの宗教との関連においてのみ考えるのは早計にすぎるのである。Rösch の説明では、Epiphanius の記事中の前半と後半の關係が不十分にしか解明されていなく。Alexandria では「処女神」が「永遠」(Aion)を生んだ、のに対して、Petra では同じく「処女神」が「主の一人子である Dūsārēs 神」(“Dūsārēn tūtestin monogenē tūdespotū”)を生んで、となつてゐるが、ここに出づゑ「永遠」と Dūsārēs 神の關係はどうなるのであろうか。Rösch は又、「主の一人子」と「処女神」からの降誕に関して次のように云つて<sup>(38)</sup>いる。即ち、当時のキリスト教徒は処女 Maria と異教の Venus-

Aphrodite 女神とを同一視してゐたので、Allāt 女神とその子 Dūsārēs 神を Epiphanius が誤解してキリスト教的に理解し、Dūsārēs 神は処女から生れた主の一人子である、と書いたのである。しかし、クリストの呼称 “monogenēs hyios tū theū” と Dūsārēs 神の “monogenēs tū despotū” との異同はなお考察を加えるべき点であらう。Dūsārēs 神を生んだ “despotes” とは何者であらうか。又、Rösch は雷神としての Dūsārēs 神を考えているが、前々稿で述べたようにこの神は本来雷神であつた、と云う証拠はない。アラム人の雷神 Hadad と Dūsārēs 神の習合は後述のように実証され得るが、Rösch はその点について何も触れていない。要するに、Dūsārēs 神が冬至にその生誕を祝われるためには、まず本地である Dionysos 的生育神から太陽崇拜の神へと進化しなくてはならないのであり、その原因は Horus 神との習合にばかりでなく、ローマ帝政初期の時代にシリアに流入してゐたと見られる “chaldéo-persique” (Cumont) の太陽崇拜、特に Mithra 神とその信仰にともなう「永遠」「誕生石」「処女金星」等の崇拜との習合にも求められ得るであらう。<sup>(39)</sup>

Rösch は Epiphanius の記事の中の「永遠」の誕生と云う点には注意してゐないようである。又、その記事だから考えれば、Alexandria の「永遠」と Petra の Dūsārēs 神とを敢えて對比する必要はなく、対比すべき点は、処女神からの冬至に於ける若神の誕生と云う点であると考えてもよさうである。しかし、ナバテア人が太陽神殿で「時間」の生誕を祝つた、と述べるも



う一つの史料があり、それを認めるならば、Epiphanius が Alexandria の祭祀と Petra のそれとを述べるに当つて、両者を結びつけた「これは又……」(“tuto de kai…”)なることばの中には「永遠」の生誕と云う觀念も含まれている、と考えなくてはならない。<sup>(40)</sup> その史料は後一〇世紀初頭のバビロニア人 Ibn Wahsiija の書いたものと伝えられる偽書 “Falaha Nabatiya” (“ナバテア人の農業”)であつて、その云わんとするところはアラビア人の文化に対するアラム人の文化の優越性の主張である。そのために著者はかつてのナバテア人と云うアラム系文化の継承者の事蹟を記している。<sup>(41)</sup> それによると、ナバテアの農耕者たちは二つの祭を行つが、「その一つは時の生誕 (id milad az-zamān) とその更新の祭であり、他は元旦祭であるが、共に太陽に關係を持つてゐる。」そして、筆者は太陽神殿の時の生誕の祭を目撃した、と云う。<sup>(42)</sup> Cumont によれば、<sup>(43)</sup> この史料は既出の Epiphanius の系統に属するキリスト教的、或はギリシア語的伝承とは別の根拠によつており、前者の伝承の真实性を証明すると云う。Eisler は「時」(“zaman”)は古ペルシア語の Zurvan 即ち、「永遠時間」又は「運命」の神に通ずるとして、マズダ教から発展した Zervanism (Zurvan 神崇拜) が背景にあつた、と主張した。<sup>(44)</sup> そして、Alexandria の “Aion” 崇拜もエジプトのペルシア領時代にこの Zervanism がエジプトに影響を与えた結果である、と云う。<sup>(45)</sup>

以上 Cumont, Eisler 等による Röscher とは逆の方向からの

宗教混合による Epiphanius 解釈を紹介したのであるが、この場合もシリアの一地方神 Dūsārēs の生育神としての本地から一挙に「永遠」の神、「太陽」の神としての Dūsārēs 神にまで飛躍しすぎているように思われる。<sup>(46)</sup>

#### (B) Dūsārēs 神と Ba'al-shamin 神

既に記したように、<sup>(47)</sup> Dūsārēs 神の太陽神としての性格を示す史料は比較的少く、Sourdel のようにそのような性格の存在を全く否定しないまでも、それが本地であつたとは認められないのであるが、Cumont や Dussaud は<sup>(48)</sup> 上記の Epiphanius の冬至の祭の存在を併せ考えて Dūsārēs 神の太陽神性を断定している。又、Suidas の記すペトラの黒い Dūsārēs 神の神体と似た、円錐形の巨大な黒い石が Emesa (Homs) にあり、それは Zeus から生れた太陽であると云われていた (Herodians, V, iii, 4-6) が、その石は Elagabal と呼ばれた。この意味は「山の神」(El + Gabal) であり、Dūsārēs 神と同じ本地であつたことを推測させるが、古銭上では “Sol Invictus Elagabal” (“不敗の太陽たる Elagabal 神”)とよばれ、その祭司 Elagabalus 帝は “Sacerdos dei Solis Elagabali” と唱えられた。又帝の別名 Helio-gabalus はこの神が Helios 即ち太陽神であつたことを示している。<sup>(49)</sup> Février はこの太陽神にはある程度シトラ教の影響があるとした。この Emesa の例は Dūsārēs 神の太陽神的性格の存在が可能であることを示すものであろう。しかし、自然崇拜的色彩の濃い生育神 Dionysos-Dūsārēs と、処女からの

冬至における「永遠」の生誕と云うようなヘレニズムの密儀を思わせる年の若神としての Dūsārēs 神との間隔はもつとくわしい説明がなくては埋められないようである。

この点で、E. Meyer が Petra の冬至の祭の太陽神は Ba'al 的なタイプの太陽神である、と云つてゐるのは興味深い。即ち、シリア・フェニキアの沃地の主神 Ba'al は、生産力の年毎の再生を司るから、当然太陽神としても考えられるのである。Ba'al-bek の主神はヘレニスティク時代以後、このような Ba'al 神と雷神 Hadad の習合したものであつたが、それはこの町のギリシア名 "Heliopolis" (「太陽市」)、祭神のラテン名 "Jupiter Heliopolitanus" (「太陽市の Jupiter」) が示すように、太陽神でもあつた。<sup>(52)</sup> Emesa の Heliogabal も Ba'al であつた。

それ故、ナバテア人が定着したシリアの地で、Dūsārēs 神と同じく沃地の生育を司つた Ba'al 神とがどのような関係を持ち、後者の神観念は当時どのようなものであつたかについて次に述べよう。

Ba'al の原義は「所有者」「主人」であつて、人々とその財産は一切神のものであると云う観念にもとづいて崇拜されたのであるが、シリア・フェニキアの各地で非常に古くから、地方的祭神として信仰された。その中には、Sidon, Tyros 等都市の主神である場合<sup>(54)</sup>「アマヌス山の Ba'al」<sup>(55)</sup>「丘の Ba'al」<sup>(56)</sup>(Ba'al-cened) のように山地の神である場合などあり、地方的王朝の始祖神とされることもあつた。こうした地方的な Ba'al 神崇拜で特に興味のある点は、「Shara 山の主」Dūsārēs 神と同じくして、Ba'al

神も本名で唱えられず、普通名詞で発声されたこと、<sup>(57)</sup>又両者とも同様丘陵の主であつたことである。

ところが、西紀前一二世紀になると、シリアの地中海沿岸で栄えていた港町 Byblos (セム名は Gebal「山」) から、Ba'al-shamin と云う新しい Ba'al 神が現われた。「天の主人」と云う名のこの神は、Dupont-sommer に従えば、やがて全フェニキアにひろがり、そこからシリアの Hamath (Aleppo) に移入され、全シリアで信仰されるようになったが、他の Ba'al 神信仰と異り、地方的な性格がなく、普遍的な神格として超部族的、超時代的に信じられ受け継がれて行つた点に大きな特色がある。<sup>(58)</sup> Byblos の Philōn (FHG, III, 565f.) はこの神をギリシア語で "theon mōnon ūranu kyriou Belesanēn" (「天の唯一の主なる神ルーサメース」) と表現している。Cooke, Férier それに Cumont は Ba'al-shamin 神のこのような超越的な性格はペルシア帝国の世界支配の体制と関係をもつたものと考えている。<sup>(60)</sup> 即ち、この神の普遍的な性格がアケメネス王朝の支配体制と一致したために、この頃から Ba'al-shamin 神は急速に全シリアにひろがつたことが碑文史料の増加によつて分る、と云うのである。しかしながら、世界主義的傾向がこのような神格の進化に寄与するとならば、ヘレニスティク世界が Ba'al-shamin 神をより高度な神観念に向わせたことは当然であつて、とりわけ Palmyra や Hatra でその明瞭な証拠が見出されて来た。

Palmyra の公式の祭神は「バビロニアの Bel-Marduk 神と土

着の太陽神 *Boi* が習合したらしい *Bel* 神であつたが、多くの碑文、神符の文字の示すところでは、この市の人々は *Bel* 神について高度な神観念に到達しており、殆んど個有名詞を失つた唯一の普遍的神格を想つていた。ギリシア語で「いと大いなる *Zeus*」と呼ばれる時、その *Zeus* 神は殆んど普通名詞の「神」が表わす観念に等しかつたと云う。<sup>(61)</sup> 同市で西暦一世紀以後、これと並行して、又これとの関係は不分明のまゝ盛んに崇拜されたのが *Baal-shamin* 神であつて、その称号「大いなる」(*RB*)「善き」(*TB*)「憐み深き」(*RHMN*; *TYR*)、又ギリシア語碑文で「報い給う」「いと高き」「いと大いなる」などをつけて呼ばれていた。<sup>(62)</sup> 又、*Hatra* では、「王」(*MLK*)、「大いなる」、「神」、「創造主」(或は「大地の主」)などと称された。<sup>(63)</sup>

とりわけ、*Palmyra* では個有名詞も通称も持たない無名の神が、西暦一〇三年一〇月から同二六八年四月までの約一世紀半の間、他の神々のほとんどすべてにとつて代つて崇拜されていたことが、碑文によつて約一〇〇例知られている。<sup>(64)</sup> この無名の神は *Baal-shamin* と同様に、「憐れみ深き」、「大いなる」、「いと高き、いと大いなる *Zeus*」などと唱えられる他、「その名の永遠に祝福されたる」(*LBRYK ŠMH LLM*)とも呼ばれた。<sup>(65)</sup> およそ古代の神観念において、このような普遍的、超越的な神格の性格づけがなされたことは、少くとも一般人の信仰においてはあり得ないことであつた。それ故に *Clermont-Ganneau* や *Lidzbarski* のような初期の研究者は、この「知られざる神」はユダヤ人の *Yah-*

*weh* 神以外のものではあり得ない、と考へた。<sup>(67)</sup> その後の研究者たちも旧約聖書の神観念の影響があることは確かであるとい<sup>(68)</sup>るが、但しユダヤ教の神そのものではなく、本地はこの神の出現の前から同じ呼び方をされていた *Baal-shamin* 神と考えられている。<sup>(69)</sup> その際、*Février* は「知られざる神」が出現した頃(後二世紀初頭)、シリアはトラヤヌス帝によつて再征服されたので、ローマの *Jupiter summus* 神と *Baal-shamin* 神とが習合して、後者の神観念につきもう一段上の普遍化が起つた、とした。又、*Starcky* は、*Baal-shamin* 神の信仰がユダヤ的、ギリシア的な思想の作用をうけて個別的な名称や神性を脱皮して純化しつゝあつたとして、こうした一神教へ向うシンクレティズムを“*associationisme*”と云ふことばで呼んでいる。いずれにしても、西暦一世紀以後 *Palmyra* に一神教的な信仰があり、精神的倫理的に高度な神観念に到達していたと云えよう。

こうした *Baal-shamin* 神の神観念の進化を最もよく表わすものが、この神に付された「永遠の主」或は「世界の主」と訳される *MR' LLM* (= *marē alma*) であつて、この呼び方は後述する *Dūsares* 神を除くと、専ら *Baal-shamin* 神と *Palmyra* の「知られざる神」にのみ与えられている。この“*alma*”は *Nöl-deke*, *Cumont*, *Starcky* 等によつて説明されたところによると、<sup>(70)</sup> シリア・バビロニアの祭司達のもたらした高い宗教性を示すことばであつて、「世界」「永遠」「運命」の一体となつた観念を表わす。<sup>(71)</sup> そして、これが *Baal-shamin* 神の神性を表現するた

めに使われたことは、この神の信仰の一神教的性格を明らかに示している。Caquot によると、Hatra の Ba'al-shamin 神が「大地の主」と呼ばれたのも、この「世界の主」に相当する。「Maré alma」の出る碑文の例を二、三訳出すると次のようになる。

「セレウコス紀元）四二五年（A. D. 114）に、Ba'al-shamin Maré alma に Nebozabad と Yarithbôia が彼等の救い、その子等の救い、その兄弟たちの救いのために（これを）建立せり。」（祭壇奉納碑文）<sup>(72)</sup>

Ba'al-shamin 神の名の挙げられていない例として、「（セレウコス紀元）四七四年（A. D. 152）一〇月、Mojimô Matta を祖々父、Hairân を祖父、Zebida を父とする Bôlâ が、Efca の（聖なる）泉の守護職にあつた時、（彼が）Maré alma のために（捧げた）捧げもの。」この碑文のギリシア語部分には「いと高き、いと大いなる、報いを与え給う Zeus 神に」とあり、Maré alma は Ba'al-shamin 神のギリシア語による呼び名、「いと高き」と大いなる」に相当していることが分る。

以上の Ba'al-shamin 神についての考察を要約すると次のようになる。即ち、Ba'al-shamin 神、「天の主」なる神はローマ帝政初期以後、永遠の時間の支配者、世界とその運命の支配者であり、従つてこれ以上の神格は存在し得ないところの「神そのもの」、「一つにして唯一の神」であつた。これは又、人間の願いを憐みをもつて聴きとどけ給う根源的な親神であつた。それ故、

Starcky はこの神の神性を超越者と恩恵者との二つにまとめている。<sup>(74)</sup> このような神観念の由来については更に深くほり下げて解明されなくてはならないにしても、ローマ世界とペルシア世界の中間にあつて、多くの新宗教の発生・発展の地であつたシリアの強力な隊商都市 Palmyra でそれが出現したことはむしろ当然であつて、文物の交流の盛んな、自由な雰囲気のある大都市の力を示すものに他ならない。

このような Ba'al-shamin 神の崇拜は Palmyra と Hatra のようなシリアの北部に限られていたのではなく、南部、即ちナバテア人の影響下にあるシリアでも流布していた。即ち、この場合は Dūsarēs 神の流布と重複していることになる。

まず、Haurân 地方に次の三例が見出される。(i) Si<sup>(75)</sup> にあつた Ba'al-shamin 神殿の建立を記したかなり長文の碑文。「Mugh-aivir を祖父とし、Aus を父とする Malikat の敬虔なる思い出のために。彼は Ba'al-shamin 神のために、この内陣と外陣、又前庭とその屋根を、（セレウコス紀元）二八〇年から（同）三〇〇（三一）年の間に建立した。生ける人々に平安あれ。」日付は破損していて不明瞭であるが、Littmann は 33/32-2/1 B. C. の間であろうとしている。この碑文によつて、ナバテア人が Palmyra で Ba'al-shamin 神の崇拜が盛んになる前からこの神を崇拜していたことが分る。又、ナバテア人の建てた神殿のプランをも知ることが出来る。E. Littmann によると、この建て方はナバテア人独自のものと云ふ。<sup>(76)</sup> (ii) Bostra の近くの Sindj

(Is-Summākiyat) の奉納碑文<sup>(77)</sup>。「これはKasiu 族の神 Ba'al-shamin のために彼等によつてなされた。」この碑文は'E. Littmann の註釈による。Kasiu 一族によつて Ba'al-shamin 神が公に採用されていたことを示す。<sup>(78)</sup>(iii) 後七〇年、Salkhad の奉納碑文の第五行に、「Mattanō の神 Ba'al-shamin のために」とあり、これも (ii) の場合と同じように解釈されよう。Haurān 地方以外では、Agaba 地方の Iram の聖所でこの神の名が知られる。<sup>(80)</sup>

以上は Ba'al-shamin 神の名が現われている例であるが、至高の神として単にギリシヤ語の呼び名だけで碑文に出る例は非常に多い。Sourdel は種々な呼び名に Haurān 地方の例をまとめている。<sup>(81)</sup>それによつて (i) Zeus とつて出る場所——Hébran (ラテン語 Iovi とつて) Sahwet el-Belat, Meseiké, Sheniré, Si', Moushennet, 'Aqrabah, Sanamein. (ii) Zeus, Megistos (いと大なる) とつて出る場所——Hébran, Karak, Hit, Shagga, Kafer, Souweida, Qanawat (bis), Tell el-Ash'ari. (iii) Zeus Megistos Hypsistos (「いと大なる、いと高き」) とつて出る場所——Mismiye. (iv), Zeus Megalos (「大なる」) とつて出る場所——Salkhad. (v) Zeus Keraunios (「雷」) とつて出る場所——Hebran (bis), Moushennet, Malikiyé, (vi) Zeus Kyrios (「主」) とつて出る場所——Bostra, Hébran (bis), Si' (treis), Sahwet el-Khidr, Bouthiné, 'Aqraba, Sanamein (bis). (vii) Zeus Epékoos (救済者) とつて出る場所

所——Oumm el-Djermal (ここでは「聖なる救済者 Zeus」Dihagio epékoō と出る) 他一例。(viii) Zeus Epikarpios (「よき収穫の」) とつて出る場所——Bostra の他、Haurān 地方以外に Gerasa の一例。(ix) Zeus Sôtér, Phosphoros (光をもたらす救済者) として出る場所——Souweida (奉納者の船が難破しかかった時、星の光で救われた感謝を述べた碑文)。

これ等の呼び名のうち、Zeus, Megistos, Hypsistos, Kyrios については既に述べたところで問題はない。又、Megalos は Megistos に準じて考えられるべきものであらう。Sôtér, Phosphoros, Epékoos は特殊な事情の下に奉納された場合であり、「憐れみ深き」「報い給ふ」などの呼び名と関係しているのである。(Epékoos は Palmyra でも知られる。) 一方、Keraunios と Epikarpios については説明を要する。「雷神」は雨をもたらすものとして、又、「よき収穫の神」はその名の示す如く、沃地の豊作をもたらす恩恵者としての神である。Sourdel は Ba'al-shamin 神、即ち「天の主」なる神は天の支配者として、雷雨を司り、沃地のみりをもたらすのであるから、「天の主」の神性からこれ等二つの神性が出て来る、と述べている。<sup>(82)</sup>これは丁度、日本古代の抽象的・普遍的な「天之御中主神」と云う天神と生産力を意味する産霊<sup>ムスヒ</sup>の關係に似ていると云えよう。

事実、Palmyra とメンポタミアの Et-Tayibeh の奉納碑文には Ba'al-shamin 神が、<sup>(83)</sup>又、Zeus Megistos Keraunios と呼ばれておる。<sup>(84)</sup>又、Palmyra と Dura-Europos の Epikar-

pios と呼ばれる神或は(後者の場合は)麦の穂と果実の房をもつ Ba'al-shamin = Zeus Kyrios 神像が見出されている<sup>(85)</sup>。従つて、Haurân 地方の農耕生活の中心地であつた Bostra で、Ba'al-shamin 神が恩恵者として Epikarpios と称されても不思議ではない。

しかし、この点で考慮すべきことはアラム人の雷神 Hadad と Ba'al-shamin 神の習合である。Hadad 神は本来メソポタミア土着の雷神として穀物のみのりを司つたとも云われるが、アラム人が北シリアの沃地に入つた時、まず Membidj-Hierapolis でこの神の信仰を継承し、全シリアへ流布させたようである<sup>(87)</sup>。

Balbek ではこの神と Ba'al との習合が知られていることから推測し得るように、Hadad 神も早くから単なる自然崇拜の神以上のものになつていたのであつて、Byblos の Philôn (FHG, III, 569) は "Adôdos basileus theôn" ("神々の王 Hadad 神")と書つてゐる<sup>(88)</sup>。Hatra では Ba'al-shamin 神の場合と同じように、本名が消え失せて、「我等の主 (MR)」と呼ばれてしばしば現われる<sup>(86)</sup>。

それ故、Sourdel や E. Will は Haurân 地方の Ba'al-shamin 神はその恩恵者としての神性により、雷神 Hadad と習合したと考えてゐる<sup>(85)</sup>。Haurân 地方以外のナバテア領について見ると、Nelson Glueck がトランスヨルダンの Khirbet Tannur で Hadad 神崇拜の多くの痕跡を見出している<sup>(82)</sup>。Sourdel はこの Hadad 神は Ba'al-shamin 神でもあるかも知れなかつた<sup>(83)</sup>。

ているが、一方、Zeus の名の下に同一の神と看做された可能性が強い<sup>(94)</sup>、とする。

さて、南シリアの Ba'al-shamin 神は遅くとも前一世紀までにナバテア人やサファア人の間に流布していたことは明らかであるが、この地の主神 Dūsarēs とどのような関係にあつたのであるうか。

この点について第一に重要な史料として、Haurân 地方 Sîr の上出の Ba'al-shamin 神殿建立がある。かの碑文の出た神殿を最初に発見し調査したのは Melchior de Vogüé であつたが、一九〇四年及び一九〇九年に Princeton 大学の発掘隊が再調査した結果、同神殿の前、向つて左手に、それよりかなり規模の小さいほぼ方形の神殿跡が見出された<sup>(96)</sup>。そして、その神殿から、ブドウの房から半身を現わした青年像(即ち Dionysos 神の像)のある祭壇が発見されたので、これは Dūsarēs 神殿であるとされ、Ba'al-shamin 神殿との対比によつて、西暦一世紀に建立されたと推定された<sup>(97)</sup>。ところが、上述の Sîr で見出されている三つの "Kyrios" ("主") といふ Ba'al-shamin 神の呼び名のうち、その一つがこの Dūsarēs 神の祭壇に彫られているのであつて、ここから Ba'al-shamin 神と Dūsarēs 神の習合の問題が起つてくる。

既に述べたように、Haurân 地方の Dūsarēs 神は典型的な沃地の生育神 Dionysos の神性をそなへるものであつたが、A. Grohmann, F. Cumont, Baethgen 等は早くからこの

Dionysos-Dūsarēs 神と Zeus Epikarpios-Ba'al-shamin 神との習合を認め、或はその可能性を論じていた。<sup>(98)</sup> Sourdel も Haurān 地方のブドウ園の守護神として、又収穫の神として、Dūsarēs 神が Ba'al-shamin 神と習合したことを認め、上記“Kyrios”が Dūsarēs 神殿祭壇に見出されたことについて次のように論じている。<sup>(99)</sup> 即ちこの祭壇の意味するところは、Dūsarēs 神像を Ba'al-shamin-Kyrios 神に奉納したと云うことであつて、このような信仰形態はヘレニステイク時代のオリエン트에例が多い。「それはしばしば緊密な近縁関係を示しているらしい。Banias ではニンフの Echo 像が Pan の神にさざげられ、Palmyra では Malakbel 神の像が Shamash 神に献じられてゐる。(Haurān 地方の)この場合も同様な例であつて、Sī' や Ba'al-shamin 神の神殿の隣りの神殿でまつられていた Dūsarēs 神は前者の臣下としての存在 (subordone) 或は従者 (acolyte) として信じられていたと云えよう。」

Sourdel のこの意見は習合の場合の一つの形態をほり下げたものとして重要である。<sup>(100)</sup> 沃地で早くから高度な神観念に到達し、或は到達しようとしていた Ba'al-shamin 神は「天の主」として、万物の主人としての地位にあつたが、Dūsarēs 神の方は遊牧民に由来する生育神が沃地神に進化したものにすぎず、神格の普遍性において差があつた、とみなくはならない。従つて、両神の同質性は Ba'al-shamin 神の農耕生活に対する恩恵者としての面にだけ限られていた。R. Dussaud はノマドたちの定着

に當つての宗教の変化について、「ノマドは固定的な信仰を持たないので、(定着に當つて)その社会的同化を完成するところの、定住社会の祭祀を採用する」と述べている。<sup>(101)</sup>

当時のシリア遊牧民の定住社会への吸収同化は Dūsarēs 神の Ba'al-shamin 神へのそれに対応する。

Dūsarēs 神が Ba'al-shamin 神と同じく Zeus と呼ばれた例が見出されている。それは前九年に、ナバテア王の宰相 (epitropos—Strabon, XVI, 4, 24) の Syllaos (Šullai) が小アジアの Miletos の Apollo Delphinios 神殿で残した奉納碑文であつて、そのギリシア語の方に、「王の兄弟 Syllaos が Zeus Dūsarēs 神に奉納せり…」とある。<sup>(102)</sup> この Zeus が両神の習合したものを表わすと云うことは、Haurān 地方に於ける Ba'al-shamin 神殿の建立がこの碑文と同時代、或は先行すると考えられるので、あり得ることである。

さて、このような Zeus Dūsarēs 神は沃地の生産力を司る神として、例年の祭が自然の更新を祝つて行われる。Robinson は上に述べた Epiphanus 及び Ibn-Wahsiyya の史料が伝えるペトラの太陽神殿における冬至祭の正体は、こうした自然の再生を意味する復活祭の一種である、と考へている。<sup>(103)</sup> そして、その日には Haurān 地方からも参拝者が来て、ペトラ市内の「高きところ」で行われる夜祭に加つた、と云う。

Sourdel は Dūsarēs 神の太陽神としての性格を認めず、<sup>(105)</sup> Robinson や E. Meyer の「この神が Ba'al のタイプの太陽神で

あると云う説に対立するばかりでなく、Haurân 地方における太陽神崇拜も大したものではなく、他の神々により遅れて出た、と主張する。<sup>(108)</sup> 即ち、後二世紀に素性の分らない太陽神が Rimet Hazim で崇拜されていた他は、同四世紀以後 Zeus Hēlios が碑文で知られるだけである、と云う。しかし、Dūsarēs 神の太陽としての属性が Ba'al-shamin 神への吸収の結果ますます明確な沃地の生産力崇拜の神となつたことから由来するとすれば、その属性はかなりおくれれて明らかになる筈であり、又その祭の儀礼を説明する神話もおくれれて形成された、と考えるべきであろう。

更に考えるべきことは、Sourdel も認めてゐるやうに、Dūsarēs 神が Ba'al-shamin 神の“acolyte”と看做され、しかもその毎年の生産力の更新が祝われた、とすれば、この更新も又、「天の主」即ち「世界・永遠・運命の支配者」の摂理の下で行われるのであるから、「天の主」が自らの属性たる産靈 (Dūsarēs) を自らの手で生み出す、即ち、両者は父子の關係にある、と考えられるようになるまでに大した距離があるうか。そして、「天の主」の妃であつた Ba'alat-Allāt 女神が同じく「神々の母」として、「誕生石」の姿で生育の太陽神を生んだ、と考えられはしなかつたか。即ち、Epiphanius の伝える太陽崇拜とその神話は生育の神の恒年の祭祀が生み出したものである。

次に、Sourdel の蒐集に従つて、<sup>(109)</sup> Haurân 地方の「太陽神」崇拜の実例を見よう。(i) Zeus Hēlios として出る場所—Rimet Hazim (Qanawat 附近、後二世紀)、“Hēliō theō megistō…”

「いと大なる神 Helios 也…」Tafha (Shonba の南東、1. 2/3 “theū…Hēliō”), Smeid (Boureiké 附近) Bouraq. (ii) Zeus Anikētos Hēlios として出る場所—Deir el-Leben (後四世紀) “Dios anikētū Hēliū theū Aumū” “Aumos の神、不敗の太陽たる Zeus 也” Damet el-'Alya (“theō anikētō Aumū oikodomēsen to koinon kōmēs Damathōn”) “Damathoi の村の集會が Aumos の不敗の神に社をつくつた” Deir el-Leben (Mourdouk 附近 “Zeū anikēte, hysū Uraniū ton eusebēn”) “高き天の不敗の Zeus 也、敬虔の念を(捧ぐ)”) Ahiré (“Basileū despota, hīlathi kai didū pasin hēmein hygiēn katharan, prēxis agathas kai biū telos esthlon.” “主人たる王よ、栄光あれ、我等すべてにきよらかなる健康を、善きおこないと生活の幸福な充足とを与えんことを”。

Sourdel はこれ等の碑文に出る “Anikētos”, “Basileus Despotēs” 等は他の神々にも与えられた呼び名であるとして、Dūsarēs 神とは關係がない、としているが、又一方で既に挙げた “Anikētos Dūsarēs” の碑文について同じ理由で、<sup>(109)</sup> Dūsarēs 神の太陽神性を示すものではない、と云つてゐる。しかし、この主張が全くの仮説であることは明らかで、逆に、太陽神 Dūsarēs が Haurân 地方で遅くとも後二世紀にはかなり信仰されていた、と云う仮説を立てることも可能であろう。上記の Sr の Dūsarēs 神殿を発見した Butler はその神殿の前でミトラ教の浮彫 (牛を屠る神 Mithra) の像) を発見したが、<sup>(110)</sup> それ以後こ



の地にミトラ教神殿が存在したと信じられている。<sup>(111)</sup> Wellhausen は Epiphanius の云う冬至祭にはミトラ教の影響があつたと主張したが、<sup>(112)</sup> Sir のレリーフが Dūsārēs 神殿の前で発見された点を重くみる Cumont は、これによつて Dūsārēs 神と Mithra 神の習合が実証された、と考えた。<sup>(113)</sup> これには尚有力な反対論もあるが、シリアでのミトラ教流布を示すその後の史料は序々に増加しているのである。

それ故、Haurân 地方の太陽崇拜と Dūsārēs 神が何等かの關係を持つてゐることが十分に感得されるであらう。とりわけ、Dūsārēs 神と Ba'al-shamin 神や Hadad 神との習合を前提とする時はそれがますますはつきりして来るのであつて、例えば、'Ahiré の "Basileus Despotes" をみると、上記のように Ba'al-shamin 神も Hadad 神も "Basileus" と呼ばれた例があり、又 "Despotes" にいたつては Ba'al の原義にも近く、更には "Maré alma" の "Maré" (「主」) と同義語なのである。特に Epiphanius が Dūsārēs 神を「主の一人子」("monogenes tu despotu") としたことは、これ等の「主」とが無關係とは云い切れないであらう。Ba'al-shamin 神を本地とする「知られざる神」は「世界—永遠の主」であり、その産靈 Dūsārēs 神は子であり、垂迹であり、顕現である。

ミトラ教の側でも、丁度時を同じくして、カルデア天文学やオルフェウス教神学の影響の下に、至高天の永遠の場において、その顕現である救世主 Mithra 神が聖なる石 (petra genetrix)

から生れると云う、唯一神の働きについての思想が形成されて<sup>(114)</sup>いた。この形成はヘレニスティク時代のオリエントで行われたと見られるが、それと如何なる關係があつたかは別としても、シリアの地で「天の主」の信仰を中心として、強力な一神教化の傾向があつたと考えても不思議ではない。Dūsārēs 神と Ba'al-shamin 神とが上のような形で習合しつつ、しかも、高等な同質性を保つていたことは、次に記す、ナバテア王国南端の町の Hegra の「Ragōs の大墓碑銘」と呼ばれる碑文 (A. D. 267)<sup>(115)</sup>によつて推測されよう。

「これは Haretat の子 Ka'bō が、その母によつて 'Abd-manōto の娘 Ragōs のために建立した墓所である。彼女は(セレウコス紀元)一六二年、タンムーズの月(七月)に Hégrā で死去した。"Maré alma" は彼女の子孫以外の者でこの墓を改造したり、あばいたりしたものを呪うであらう。又、彼等の上にあるもの(墓所)を改造したものを呪うであらう。」

この碑文に言及しているすべての研究者 (Eisler, Grohmann, Cumont, Cantineau, Littmann, Sourdel) はここに出る「世界—永遠の主」("Maré alma") が Dūsārēs 神であることを認めているが、特に Cumont は上記のように Mithra 神と Dūsārēs 神との習合による太陽崇拜—一神教の形成がシリアでも起つていた、と云う立場から、岩から生れる Mithra 神が "Saecularis" (「永き時の」) と呼ばれる碑文を参照して、Dūsārēs 神も又、Epiphanius の記した通り、「聖なる石」から生れる "Aión"

即ち “Maré alma” とあつた、と論じた。<sup>(117)</sup> それに対して、Sourdel はこれも又 Sol Invictus の信仰、即ち Cumont の云う太陽崇拜一神教とは無関係である、と反論した。<sup>(118)</sup> これ等に対し、本稿の意図はエジプト或はペルシア・カルデアの高度の神觀念の流入の有無にかかわらず、シリアの地では Palmyra の「知られざる神」に代表される至高存在の觀念が独自に発生し、そこから聖処女を通じての同質の一人子の生誕と云う思想が派生した、と云うことを示すことであつた。このことは太陽崇拜一神教が西暦二―三世紀の間に救済宗教の根本的骨格を形成したことを示している。そして、このような進化が可能であつたのは、それぞれこの地方で何度か起つた世界主義・普遍主義の文化運動と、沙漠から新しい活動力を社会にもたらしてくるノマドの定住運動の波とが、それまでのどの事例よりも高度で繁栄した程度において結合したからに他ならない。

(完)

註

- (1) Cf. G. Contenau, *La déesse nue babylonienne, étude d'iconographie comparée*, Paris, 1914. この本はリエント各地の裸の女神像について論じられている。
- (2) R. Dussaud, *Review to G. Ruckmans, Les religions arabes préislamiques, Syria* 29, 1952.
- (3) 後述する *ba'al-shamin* シリア・フェニキアの天神 *Ba'al-shamin* の信仰は早くから一神教的性格を持つに至つてゐた。*Ba'al-shamin* は古代末に近づいてあつた太陽神を

吸収して普遍的な神格になつた(R. Dussaud, *Les Arabes en Syrie avant l'Islam*, 1907, p. 157s.) とする。これは古代的多神教への反作用である(G. A. Cooke, *A Text-Book of North Semitic Inscriptions*, 1903, p. xxii) とする。又「多価的神格」(figure polyvalente) への脱皮である(E. Will, *Review to D. Sourdel, Les cultes du Haurân*, 1952, *Syria* 30, 1953, p. 152) とも云われている。アラム人の主神 Hadad 雷神も抽象的な大神へと変化してゐる(A. Caquot, *Nouvelles inscriptions araméennes de Hatra, Syria* 29, 1952, p. 115s.) Haurân 地方では Hadad も *Ba'al-shamin* も区別がなくなつてゐた(E. Will, *op. cit.*, p. 151ss.)。これ等の神と *Dūsārēs* 神の關係は後述する。

(4) E. Will, *op. cit.*

(5) Epiphanius の “*Adversus haereses*” は一八六〇年 2 F. Oehler (*Philologus* XVI, S. 355s. = *Corpus haeresologicum*, Bd. II) に Dindorf (*Epiphanius* 集、全三巻、Leipzig, 1859-1862, S. 483, 6-S. 484, 5) によつて、独立に校訂出版され、*Dūsārēs* 神の祭祀について論文を発表した Mordtmann, *Dusares bei Epiphanius, ZDMG* 29 (1876) や Rösch, *Das Synkretische Weihnachtsfest zu Petra, ZDMG* 38 (1884) はそれ等のテキストを使用し、かなり長文の引用を行っている。一方、K. Holl,

Griechische Christliche Schriftsteller, Bd. 31 (p. 284-) 及び Epiphanius のこの論文の校訂註釈版が収録されている。筆者はこのテキストを主として用いる。Mordtmann 及び Rösch の論文中のテキストを参照した。

(9) テキスト中のこの部分 “en ôté tē nykti tōn Epiphaneion” の解釈は、<sup>2</sup> 注意を要すると思われぬ。R. Pettazoni (Essays on the History of Religion, 1954, p. 172 etc.) はこれを一月六日の夜としていふが、F. Cumont (Pauly-Wissowa, Real Encyclopädie, I-V, Art. Dusares, col. 1866; Mithra et Dusarès, *Revue de l'histoire des religions*, 1918, p. 209s) や E. Meyer (W. H. Roscher, Ausführliches Lexikon der Griechischen und Römischen Mythologie, I-II, Art. Dusares, col. 1206) は二月二五日の夜としている。Cumont によれば、Epiphanius が一月六日のクリスマスを二月二五日の太陽生誕の祝いと一致せしめようといふ意図している、<sup>3</sup> 云々のに對し、Sourdel (Les cultes du Haurān, 1952, p. 67) 及び Dussaud (Les arabes, p. 126) は日付は問題ではなく、異教徒さえ神が処女から生れる、<sup>4</sup> と云う考えを持っている、<sup>5</sup> と云う点が Epiphanius の論点である、<sup>6</sup> と主張している。又、Cumont, Nilssen, R. Eisler は二月二五日の太陽生誕祭にはキリスト教の影響がなく、それ以前から行われていたものである、<sup>7</sup> Epiphanius の挙げてゐる「祭

り」の印も異教的シンボルである、<sup>8</sup> と考へてゐるのに對し、A. Grohmann, Wellhausen はキリスト教の作用を認めつつ、<sup>9</sup> Cf., R. Eisler, Das Fest des „Geburtstages der Zeit“ in Nardarabien, *Archiv für Religionswissenschaft*, 15, 1912, S. 629, 633; A. Grohmann, Pauly-Wissowa, Real-encyclopädie, I-XVI, col. 1466, Art. Nabataioi. Pettazoni の上記の論文は一月六日といふについても論議に重要な変更が起るとは思われない、<sup>10</sup> Epiphanius の記事のロンテキストから云つて、その意図が神の生誕の日付にかかわつてゐることは明白である。

(7) Cumont は他の文献から南シリアの他の町々—Mauna 及び Gaza—でもこの種の祭があつた、<sup>11</sup> と考えた。

(8) Oehler の校訂では “Khaabū” であるが、Dindorf の方では “Khaamū” となつてゐる。b と m は混同されやすい音であるため、後でその若干の例をあげるビザンティン時代の諸テキストでは Khamarā-Khabarā, Khamar-Khabar, Khamer-Khaber などのハトリアントが出づゐる。しかしアラビア語 Karab が原形とされる以上は、“Khaabū” の方をとるのがよく、これについて言及している他の学者も大抵は “Khaabū” として論じてゐる。

(9) “Khaabū” について、語源を問題としてゐる学者には次のような人々がいる。E. Littmann, Syria, Publications of the Princeton Univ. Archaeological Expeditions

to Syria in 1904-1905 and 1909, Div. IV, Sect. A, 1914, pp. xif.; Mordtmann, op. cit., S. 101; Rösch, op. cit., S. 649, S. 650; Sourdel, op. cit., p. 65, p. 66.; A. Grohmann, op. cit., col. 1466; R. Eisler, Das Fest, op. cit., S. 630.; Ed. Meyer, op. cit., col. 1206; Cumont, Real-Encyclopädie, op. cit., col. 1866; Cooke, op. cit., p. 218.

- (10) De haeresibus liber, Patrologia Graeca, 94, 764 A/B.
- (11) G. Rösch, op. cit., S. 649.
- (12) Topographia Christiana, Patrologia Graeca, 88, 342ff.
- (13) F. Hommel は R. Eisler に共に「このハトリトントトトなる語解以上の意味を与へ」“Khamarā” 或は “Khabarā” は古代アラビアの古い女神(地母神)の名前を伝えるものであつて、小アジアの大地母神として有名な「ディンデュメネ母神の Kybele」の語源であると主張した。Cf., F. Hommel, Ethnographie und Geographie des Alten Orients, 1926, S. 629 u. Anm. 1. 又 Hommel はまた Allāt 女神そのものがギリシアの神 Leto となつたし、Dionysos もアラビアの地合 Nysas に由来するばかりでなく、Apollo も南アラビアの神 Hubai が論入されたものに他ならない。その経路は前二〇〇〇年頃、南アラビアからリュキア、デロス島、イオニアを経てデルフォイに達したと云ふ。Cf., Hommel, op. cit., S. 711-S. 740.

(14) 「史学」37-4.

- (15) Février, La religion des Palmyréniens, 1931, p. 19; Robinson, The Sarcophagus of an Ancient Civilisation, 1930, p. 127f., p. 409f.; Cumont, Real-Encyclopädie, op. cit., col 1866; Baethgen, Beiträge zur Semitischen Religionsgeschichte, 1888, S. 100, S. 107; Hommel, op. cit., S. 717. Petra に於ける大地母神崇拜の考古学的証拠として M. A. Murray and J. C. Ellis, A Street in Petra, 1940, p. 26, pl. XXXVI-9 に掲げらる “Ashtoreth” 像がある。

(16) 上田の諸著書の他、R. Eisler, Zu den Nordkaukasischen Steingeburtssagen, op. cit., S. 307; ibid. Das Fest, op. cit., S. 629.

- (17) 「史学」上掲論文、p. 67.
- (18) 同上、p. 76, n. 69.
- (19) Cumont, Real-encyclopädie, op. cit., col. 1866; ibid., Mithra et Dusarés, op. cit., p. 209-210.
- (20) Février, op. cit., p. 25. Petra の有翼神像の記事の出所は Dalman, Petra und seine Felsheiligtümer, S. 355s. — 筆者未見。Février の挙げるものの他の例は Taanak の祭壇の子神像、“deus bonus puer” (「よき子神」) と呼ばれた Palmyra の Azizos 神、などである。
- (21) 「史学」上掲論文、pp. 61f.; p. 72, n. 20.

- (22) 同上 p. 74, n. 49. 同 p. 66 に記した Elusa のアラビア語形、「金星」を意味すると云われる halazath は又「白」純粋な」をも意味しているし、ヘルシアの大地母神 Anāhita も「純粋な」「無垢の」と称えられた (Duchesne-Guillemin, *The Western Response to Zoroaster*, 1958, p. 41).
- (23) Baethgen, op. cit., S. 38, 100, 107. Baethgen は又、Ascalon の Aphrodité-Uranie-Atargatis 女神の図像に槍が現われることを挙げ、この女神の Athena としての性格を指摘している。
- (24) 「史学」37-2, pp. 101f.
- (25) Sourdel, op. cit., p. 65s.
- (26) E. Will は Sourdel がシリア宗教のシンクレティズムに対して消極的なことを考えている (上出、E. Will の書評)。
- (27) R. Dussaud, *Les Arabes*, p. 126; *ibid.*, *La pénétration des Arabes en Syrie avant l'Islam*, 1955, p. 40-41.
- (28) 「史学」37-4, p. 59.
- (29) 「史学」37-2, pp. 98f.
- (30) Robinson, pp. 127f. Robinson は別の「穀や木の」("Valley High Place") への Dūsārēs 神の "thronos" の跡を看取している。
- (31) Sourdel, p. 62.
- (32) 例えば、「史学」37-2, p. 98 に掲げた古銭上の国像と Palmyra の神符上の三組一對の "baitylia" とではかなり相違があるように見える (Cf. J. Starcky, *Palmyre*, 1952, pl. XII, 14)。
- (33) 私は「シトラとクロノス」(「オリオン」7-3/4, p. 63-78) 及び「シリアのシトラ教」(昭和三十九年、京都大学西洋史学会大会)等において、シリアの地がヘレニズム的宗教混合の中心地であったことを示そうと努めた。
- (34) G. Rösch, op. cit., S. 650-653. Cf. Eisler, *das Eest*, op. cit., S. 633.
- (35) 「史学」35-2/3, pp. 205f.
- (36) Isis 女神は Byblos の Aphrodité 女神と同一視された (Lucianus, de Dea Syria, 6 apud Baethgen, op. cit., S. 30, 31)° Isis 女神は Byblos に旅して Ashtarte と改めた (Plut., de Iside et Osiride, 15)° ナベテム人の古銭に Isis 女神と Cornucopiae (Cornucopiae) が現われる (Cooke, op. cit., p. 70)° Memphis の壁画に Isis 女神と Ashtarte 女神とが並んで描かれている (ibid., p. 21)° 更につけ加えるならば、エジプトの神 Bes の像と現われるものや、Petra に発掘されている (Murray and Eliss, op. cit., p. 15, pl. XIV-15)°
- (37) Pettazoni, op. cit., pp. 171-179.
- (38) Rösch, op. cit., S. 653.

- (39) 上出註(33)の私の二つの論文の主要な論点の一つ。Cumont (Mithra et Dusarès, op. cit., p. 209-210)は処女神や金星神の崇拜はカルデアから由来する、と述べている。
- (40) Eisler, Das Fest, op. cit., S. 630.
- (41) Robinson, op. cit., Appendix, pp. 474-476 にその要旨の紹介がある。一九世紀にはこの史料をもとにして、ナバテア人はアラム人であったと云う説が行われた(Quatremère, Chwolson 等)。尚、アラブ時代にはナバテア人はバビロニアでアラム系文化をうけついでいたイスラーム以前のセム人のことであつた可能性もあり、Ibn Khaldun の“Prolegomena”でもバビロニア人として書かれてゐる。
- (42) Eisler, Das Fest, op. cit., S. 631s. にテキストがあがっている。
- (43) Cumont, Mithra et Dusarès, p. 210.
- (44) Eisler, Das Fest, op. cit. S. 633.
- (45) Zervanism の成立をいつてゐるかにについては學者間に大きな意見の差があるので、Eisler のこの主張を早のみにみすることは出来ない。「オリエンツ」7-3/4, p. 70 参照。
- (46) Dionysos と同じの Dūsarès 神のみ認めず Sourdrel が、Eisler-Cumont の説を強引にすぎると批判するのは、この限りでは正しいであらう (p. 67f.)。
- (47) 「史学」37-2, pp. 94f.
- (48) Cumont, Real-Encyclopädie, op. cit., col. 1867; Dus-saud, Les Arabes, p. 128.
- (49) A. Dupont-Sommer, Les araméens, 1949, p. 113.
- (50) Février, op. cit., p. 227. × Heliogabalus 帝の神に奉仕する時、メソポタミア風のガムンやサウロント (Herodotus, V. v, 3-4)。
- (51) E. Meyer, op. cit., col. 1206.
- (52) Cf., Dupont-sommer, op. cit., p. 113.
- (53) 「史学」35-2/3, p. 214.
- (54) Baethgen, op. cit., S. 19. 実例と同じは、Cooke, op. cit., pp. 30ff. (No. 5); pp. 1ff. (No. 1); p. 102 (No. 36) など。
- (55) Dupont-sommer, op. cit., p. 110. 同じ Baethgen (op. cit., S. 25) は、Ba'al-chaman と「日光の Ba'al」。
- (56) Dupont-sommer, op. cit., p. 110.
- (57) Cooke, op. cit., p. 37.
- (58) Dupont-sommer, op. cit., p. 112.
- (59) Cooke, op. cit., pp. 44f; Sourdrel, op. cit., p. 19; Février, op. cit., p. 125-127. 同じ Caquot はこの神は Byblos の出でた、シリア沙漠周辺の諸村落の極めて古い至高神であつたと述べてゐる (op. cit., p. 118)。
- Février, op. cit., p. 103-108 に従つて、この神の史料をほぼ年代順

に並べると次のようになる。(i) フェニキアの碑文(前二世紀)(ii) シリアの碑文(前五世紀)(iii) カルタゴ方言に於て Sardinia の Cagliari の碑文(前三世紀)(iv) Tyros と Akko の間に於て Oumm-el-Awamid の碑文(132 B. C.)(v) クレタ島 Kriton のカルタゴ方言による碑文(vi) Haurân 地方のナバテア人の碑文(後出)(vii) Haurân 地方のサファア人の碑文(後出)(viii) Palmyra の七例の碑文(67 A. D. bis, 114 A. D. 131 A. D., 132 A. D., 134 A. D., 後二世紀のもの)(後出)。個々のものについては Cooke, Dupont-sommer の上掲書を参照。

- (9) Février, op. cit., p. 104; p. 110; Cooke, op. cit., p. 44. Cooke (pp. 18-21) は又 Byblos の Bilit 女神(即ち Ba'al の女性形)への崇高な内容を持つ奉納碑文に関して、ペルシアの宗教的作用を考えている。Février はアケメネス王朝又はその支持をつけたマズダ教の影響力の下にユダヤ教(E. Meyer)や Ba'al-shamin 神崇拜(Lidzbarski)が形成された、という学説を参照している。

- (19) Cf. Starcky, Palmyre, 1952, p. 86-93.

- (29) Février, op. cit., p. 111.

- (33) Cagnat, op. cit., p. 98-117. Hatra には Palmyra の Ba'al-shamin 神の称号の「rahmânâ」がある。Cagnat によると「これはユダヤ教の神観念の影響があるのと無いのとのちがひである。後五、六世紀の南アラビアの碑文には、

ユダヤ教やキリスト教のものやその他のものでこの“rahmânâ”が見出されており、一神教的傾向がイスラーム以前に強まっていた証拠と思われる(R. Dussaud, Syria 31 (1954). G. Ryckmans, Inscriptions sud-arabes, 1953 への書評)。

- (64) 例えば Ba'al-shamin 神への最後の碑文の日付は 134 A. D. (Février, op. cit., p. 126)。

- (59) Février, op. cit., p. 121-122; Starcky, op. cit., p. 100.

- (66) これ等の形容の出る碑文については、Février の他、Cooke, op. cit., p. 297 以下参照。又「一にして唯一の隣み深き神」(Starcky, op. cit. p. 101)。

- (67) 旧約聖書、詩篇 72-19; 113-2 に出るヤハウェ神への呼びかけ、「その光榮ある名はとこしえにはむべきかな。」又同書、ダニエル書 2-20 に出る、「神のみ名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな。」が、上出の「その名の永遠に祝福された」と対比された。Février (op. cit., p. 124) はこの無名の神が信仰の中心となつた頃、Palmyra 全市がユダヤ教に改宗したと云うことは、碑文に出てくる人名にユダヤ人と思われるものが唯一例しかないの(Starcky)不可能であると考えた。註(33)参照。

- (89) Starcky, op. cit., p. 100. Cooke, op. cit., p. 298.

- (69) Baethgen, op. cit., S. 82; Starcky, op. cit., p. 99-

- (70) F. Cumont, *The Oriental Religions in Roman Paganism*, 1956, p. 130; p. 258, n. 80; Starcky, op. cit., p. 99; Cumont, *Fouilles de Doura-Europos*, 1926, p. 103, n. 4.
- (71) キリント語で *kosmos*, "aion", "heimarmenē" と訳される。
- (72) Cooke, p. 296, No. 134; Starcky, op. cit., p. 98f.
- (73) Starcky, op. cit., p. 99; cf. p. 92.
- (74) *ibid.*, p. 98; cf. p. 93.
- (75) E. Littmann, op. cit., IV, A, pp. 76-78 (No. 100) = J. Cantineau, *Le nabatéen*, II, p. 11 (1).
- (76) Cf. E. Littmann, *Ruinenstätten und Schriftdenkmäler Syriens*, 1916, S. 25.
- (77) E. Littmann, op. cit., IV, A, pp. 12-14 (No. 11).
- (78) Cf. Sourdel, op. cit., p. 21. 前四〇年頃の「Kasiuの神」が碑文に知られる。
- (79) E. Littmann, op. cit., IV, A, No. 23 = Cantineau, op. cit., II, p. 18-19 (vii).
- (80) Sourdel, op. cit., p. 20.
- (81) *Ibid.*, p. 22-27.
- (82) "Hagios" はフニキア内陸部で神名に付られることが多かった (Sourdel, op. cit., p. 26)。
- (83) Sourdel, op. cit., p. 28.
- (84) Février, op. cit., p. 56-57.
- (85) Sourdel, op. cit., p. 28; Cf. Starcky, op. cit., p. 98.
- (86) Dupont-Sommer, op. cit., p. 107.
- (87) 例へば Damascus の主神であった (*ibid.*, p. 114)。
- 前八世紀初頭の Zenjirli の碑文にも現われる (Cooke, op. cit., p. 159)。
- (88) Dupont-sommer, op. cit., p. 113.
- (89) Ba'al-shamin 神の Cumont (*The Oriental Religions*, p. 258, n. 80) がその「永遠・世界の主」としての神性として Julianus を引用して述べているので、「万物の王たる太陽神」("besileus tôn holōn Hēlios") と呼ばれた。
- (90) Caquot, op. cit., p. 115-6.
- (91) Sourdel, op. cit., p. 19; E. Will, *Syria*, 30 (1953), p. 152. Hadad 神の Zeus と呼ばれていた。
- (92) Nelson Glueck, *The Other Side of the Jordan*, 1940, pp. 184; 186; figs. 119; 120; 121; 123.
- (93) Sourdel, op. cit., p. 42.
- (94) *Ibid.*, p. 20.
- (95) Saba 人は Nabatea 人にややあつて Haurān 地方に定着した遊牧民の小集団で、彼等の主神は Zeus Safatenos と呼ばれた。Sourdel (op. cit., p. 86) が Dussaud (*Les arabes*, p. 168) はこの神は Dūsarēs 神と Ba'al-shamin 神の習合した結果出来た Zeus の神觀念に影響を受けたと云う。



